

現代まで人びとを魅了し続ける、フランス王妃の「スタイル」をひもとく
ヴィクトリア&アルバート博物館(V&A)が企画した世界巡回展、国内唯一の開催！

マリー・アントワネット・スタイル Marie Antoinette Style みどころ

2026年8月1日(土)~11月23日(月・祝) 横浜美術館

横浜美術館、ヴィクトリア&アルバート博物館(V&A)、読売新聞社、日本テレビ放送網は、2026年8月より横浜美術館にて、展覧会「マリー・アントワネット・スタイル」を開催いたします。

歴史上もっともファッショナブルな王妃、マリー・アントワネット。時代の「ファッション・アイコン」となった王妃の装いやインテリアは、18世紀から現代まで、ファッションやデザイン、映画などに広く影響を与えてきました。

本展は、アントワネット時代のドレスや宝飾、家具などを手がかりに、あらゆる点で新しい様式(スタイル)をうちたてていった王妃の革新性と、その人物像に迫ります。さらに王妃が形づくった「スタイル」の源泉が、いかに時代を超えて人びとを魅了し、現代のクリエイターたちにも示唆を与え続けているかについて紹介します。



本展はロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館で企画され、3月22日まで同館で開催されています。横浜美術館は、世界巡回最初の地、かつ国内では唯一の会場となります。

= 本展のみどころ =

① 時代を越えて人びとを魅了し続ける王妃の「スタイル」を紹介

ドレス、ジュエリー、家具調度品、絵画や版画、写真など、約200点で構成。18世紀後半の歴史的なファッションから2025年のオートクチュールまで、250年にわたる展開をたどります。

② ヴィクトリア&アルバート博物館(V&A)が企画した世界巡回展、日本で唯一の開催

贅沢なだけじゃない！ ロンドンにある世界有数の博物館 V&A が、史上もっともファッショナブルなフランスの王妃マリー・アントワネットを再評価。国際的にも注目を集めている画期的な展覧会です。

③ 歴史的、文学的にも貴重な品が集結。日本初公開作品も！

「首飾り事件」のネックレスの一部と伝わるダイヤモンドなど、マリー・アントワネット旧蔵品やゆかりの品(10点あまり)をはじめ、小説、演劇、映画などに描かれてきた18世紀当時の品々も多数展示。王妃の処刑に用いられたとされるギロチンのほか、ヨーロッパの歴史を転換させたフランス革命の空気も、小コーナーで紹介します。

④ 国内の関連作品を加えた日本オリジナルの展示

アジア巡回のためにロンドンでの展示から出品内容を再編成。さらに、国内で所蔵されている優品約20点も展示します。

= 展示構成・主な出品作 =

◆ 1 マリー・アントワネット:スタイルの源泉 1770-1793

オーストリア皇女マリー・アントワネット(1755-1793)は、1770年春、14歳の時に王太子妃としてフランスに嫁ぎました。以来、宮廷に新たな視点をもちこみながら、ルイ16世下フランスにおける高級産業、とりわけファッションと織物産業の発展に、多大な影響を与えました。

当時のフランスは、植民地と奴隷制を基盤とした国際的なプレゼンスに加え、文化においても中心的な役割を担っていました。そうしたなか、アントワネットは、堅苦しい宮廷の慣習に挑み、あらゆる面で自らの意向を形にしていきました。衣裳のみならずインテリアから音楽、ライフスタイルまで、よりシンプルで洗練された王妃の趣向は、またたく間に国内外で流行します。一方で、そのスタイルは斬新ゆえに取り沙汰され、民衆には想像もつかないほどの贅沢の象徴と受けとめられるようになっていきました。

革命の気運が高まるなか、アントワネットは次第に反体制派の標的となり、ギロチンへと導かれていくのです。



正式な宮廷衣裳を身にまとう17歳頃のマリー・アントワネット。この肖像画は、注文主である当時の国王ルイ15世に対して、王太子妃が将来王妃としてフランスを治めるのにふさわしい品格を備えていることを示すために制作されました。ここに描かれているダイヤモンドのチョーカーはおそらくマリー・アントワネットがウィーンから携えてきたものです。きらびやかな大きなボウ(リボン)と胸もとに下がるモチーフの組み合わせが目を引きます。

コートドレスのマリー・アントワネット
フランソワ＝ユベール・ドルレー(画) 1773年 油彩、カンヴァス 63.5 × 52.0 cm
ヴィクトリア&アルバート博物館蔵
© Victoria and Albert Museum, London



ローブ・ア・ラ・フランセーズ(フランス風ドレス)
フランス製 1760年代(1770年代に加工) 絹、光沢をつけた麻
ヴィクトリア&アルバート博物館蔵
© Victoria and Albert Museum, London

ローブ・ア・ラ・フランセーズは、18世紀のもっともフォーマルなドレスの形式。

白いストライプの走る絹地に、つるバラと花束の連続模様が施されています。少しかすれたような、やさしい風合いの花柄は、織る前に経糸を束ねて絞り染めして(つまり模様を計算して糸を先染めして!)織り出されたもの。この高度な技術を要するシネ・シルクー日本の緋に相当します—も、マリー・アントワネットのお好みでした。



結髪師レオナルド・オーティエとモード商のローズ・ベルタンが生み出した、高く盛られた髪型や華やかな頭飾りは、この時代の宮廷に特徴的な装いと言えるでしょう。

奇抜な髪型が流行すると、風刺画家たちはその姿を大げさに描き出しました。この作品のテーマは「花園」です。熊手を持った庭師のいる庭園や、垂れ下がる花々で飾りたてられた「髪」は、女性の顔の数倍のスケールで描かれています。

フラワー・ガーデン

マティアス・ダーリー(作) 1777年刊行 エングレーヴィング 35.2 × 24.7 cm

ヴィクトリア&アルバート博物館蔵

© Victoria and Albert Museum, London

マリー・アントワネットは30歳になる年に、王よりパリ郊外のサン＝クルー城を贈られます。王妃主導の改修後、王家はそこで夏を過ごしました。

この椅子は、もっとも私的な空間であった化粧室で王妃が使用したものです。小花柄や、白や紫の軽やかな色合い、背もたれの上にあるバラとギンバイカで円形に縁取られたモノグラム「MA」など、そこには当時の彼女が好んだスタイルの特徴が表れています。



(部分)

マリー・アントワネットの肘かけ椅子(4点組の1点)

ジャン＝バティスト＝クロード・スネ(作) 1788年 木(クルミ)に着彩、

絹で刺繍した綿(近年の上張り) H. 97.5 × 63.5 × 63.0 cm

ヴィクトリア&アルバート博物館蔵

© Victoria and Albert Museum, London



マリー・アントワネットの評判を失墜させた「首飾り事件」。

元凶の首飾りは、騒動のさなか盗まれ、分解され、売却のためイギリスに渡りました。その一部と伝わるダイヤモンドが展覧されます。

インドのゴルコンダ産と思われる石は、最高級の透明度と輝きで、中央の一粒だけでも約15カラットあります。歴代のサザーランド公爵夫人が継承し、ヴィクトリア女王からジョージ6世の時代まで約100年にわたり、形を変えながら戴冠式の際に身につけました。

通称「サザーランド・ダイヤモンド」

1780年代にネックレスに加工 金、銀、プラチナ、ダイヤモンド 長さ 35.8 cm

ヴィクトリア&アルバート博物館蔵

© Victoria and Albert Museum, London

◆ 2 マリー・アントワネット:追憶と偶像化 1800-1940

マリー・アントワネットは、死後も人びとの記憶のなかに生き続けました。ナポレオン3世の後ウジェニー(1826-1920)を筆頭に、19世紀には王党派の支持者たちが彼女のスタイルを懐古しました。スペインからフランスに嫁いだ皇后は、同じく外国から嫁いだアントワネットに心を寄せ、自らのイメージづくりにおいても王妃を参照しました。

一方、ブルジョワたちは、家柄の正当性を主張すべく、アントワネット風の装いやインテリアをとり入れました。こうした気運は、王妃に関わる品々が各国で収集される一因ともなりました。アントワネットの装いは仮装舞踏会の人気のテーマとなり、ときに物語の主人公にも重ねられ、そのイメージは数々の出版物を通じて世界に広まりました。20世紀初頭までに、アントワネットとその美意識は、ひとつの偶像として確立していきました。



ナポレオン3世の皇后ウジェニーはスペイン出身で、同じく外国人でフランス王妃となったマリー・アントワネットに心酔していました。仮装舞踏会を主催してアントワネットに扮するだけでなく、王妃の旧蔵品などを集めた展覧会を主催するなど、19世紀にアントワネットへの関心を高める立役者となりました。

自らも王妃と同じく宝石を愛し、スカートの後ろ側を膨らませるクリノリンスタイルを流行らせた、ファッションリーダーと呼ばれる存在でした。

皇后ウジェニー

ピエール=ポール・アモン(画) 1850年代 油彩、カンヴァス 132.0 × 100.0 cm

東京富士美術館蔵

©東京富士美術館イメージアーカイブ/DNPartcom



1920年代から30年代に活躍したジャンヌ・ランバンは、懐古趣味たどよう繊細でロマンチックな「ローブ・ド・スティール」(歴史的な様式に連なるドレスの意)を打ち出しました。

上部はすっきりシンプルに、スカートはパニエでふんわりと仕上げたイヴニングドレスは、マリー・アントワネットの軽やかなシュミーズドレスと、18世紀の豪華な宮廷服の混成体のよう。絹製の花かざりのアクセントが、透明感のあるシルクの純白をさらに際立たせます。

イヴニングドレス「ローブ・ド・スティール」

ジャンヌ・ランバン(作) 1922-23年頃 絹オーガンザ、絹の花かざり、パニエ

ヴィクトリア&アルバート博物館蔵

© Victoria and Albert Museum, London

アール・デコ期を代表する挿絵画家ジョルジュ・バルビエは、時代考証をふまえて、1920年代の洗練された感性を通して、18世紀の服飾やインテリアを細部まで表現しました。彼の挿絵にはそれとわかるようにマリー・アントワネットやヴェルサイユにおける王妃ゆかりの地が取り入れられました。

この「目隠し鬼」を描いた作品では、高く髪を結び上げ羽やリボン、花の飾りをつけて、横に大きく広がる宮廷ドレスを着た人びとが描かれています。

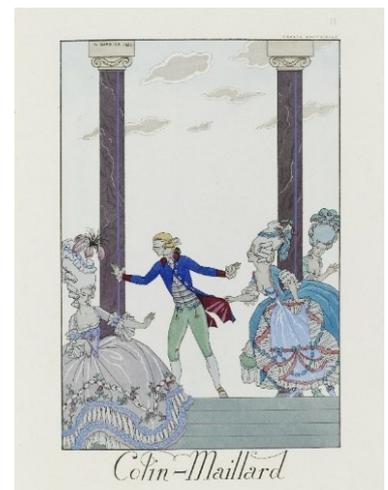
目隠し鬼(流行年鑑『髪かざりと縁かざり』より)

ジョルジュ・バルビエ(画) 1924年(1925年刊行/メニアル、パリ)

ポショワール(ステンシル)による手彩色の挿絵本 冊子:26.5 × 18.0 × 3.0 cm

ヴィクトリア&アルバート博物館蔵

© Victoria and Albert Museum, London/George Barbier



◆ 3 ^{とわ}永遠に新しく — マリー・アントワネット・スタイル

華やかさと悲劇に象徴されるマリー・アントワネットのイメージは、いまなお人びとを魅了し続けています。この章では、王妃がつくりあげた「スタイル」にさまざまなかたちでインスピレーションを得た現代のクリエイターたちが手がけたファッション、デザイン、映画、音楽などを紹介します。

パステルカラーやリボン、王妃の好んだドレスのシルエットを採り入れたファッションは、洗練とともに、退廃や破壊、さらには「女性らしさ」への問いかけや多様性など、現代社会の課題にまで視点を広げています。また、映画やテレビでアントワネットの生涯が30本を超えて作品化されていることや、舞台やミュージック・ビデオへの引用は、彼女が時代を超えたミューズであり続けていることの証といえるでしょう。



ヴィクトリア&アルバート博物館(ロンドン)の展示風景
© Victoria and Albert Museum, London

モスキーノは2020-21年秋冬コレクションで、マリー・アントワネット・スタイルを大胆に生まれ変わらせます。超ミニのパニエドレスやロングブーツ、パステルカラーの巨大ウィッグを着けたモデルたちがランウェイを闊歩。デザイナーのジェレミー・スコットは王妃にまつわる言葉を引いて、「CAKE! CAKE! CAKE! LET THEM EAT MOSCHINO!」と、写真右手の2点をふくむ「ケーキドレス」をInstagramに投稿しました。このドレス、なんとシリコン製。ケーキを着るのも楽じゃない?!



ヴィクトリア&アルバート博物館(ロンドン)の展示風景
© Victoria and Albert Museum, London

左右は、トワルド・ジュイのプリント地による、アンドレア・グロッシのアンサンブル(2019年ポリモーダ卒業制作)とヴィヴィアン・ウエストウツドのパニエドレス(1996年春夏コレクション)。中央、フリルのトレーンとティアードスカートが印象的なイヴニングドレスは、アーデムのコレクション(2022年春夏)。作品を高所に並べたロンドン展のスペクタクルな演出とは趣向を変えて、横浜ではデザインのディテールに迫れる展示を予定しています。



映画『マリー・アントワネット』(ソフィア・ Coppola監督、2006年)より
Photo: Courtesy of I WANT CANDY LLC. and Zoetrope Corp.



ヴィクトリア&アルバート博物館(ロンドン)の展示風景
© Victoria and Albert Museum, London

ソフィア・ Coppola脚本・監督、キルスティン・ダンスト主演の映画『マリー・アントワネット』。ピンヒールのパンプス、ポップミュージック、色とりどりのマカロンなど、18世紀の宮廷に「現代」を織り込んだ構成が話題になりました。第79回アカデミー賞でミレーナ・カノネロが衣裳デザイン賞を獲得、その栄えあるドレスも出展されます(右写真)。左から「ケーキを食べればいいじゃない」「礼拝堂」「庭園」のコスチューム。どんな場面か思い出せますか?

【広報素材】

本リリースのPDF データや本リリース掲載の広報画像は、
以下の URL/二次元コードよりダウンロードいただけます。

※初回のみユーザー登録が必要

<https://service.press-camp.jp/pcamp/event/773>

※展示内容は変更になる場合があります。



ダウンロード期限: 2026 年 11 月 19 日まで

【開催概要】

展覧会名: マリー・アントワネット・スタイル

会 期: 2026 年 8 月 1 日(土)~11 月 23 日(月・祝)

会 場: 横浜美術館(〒220-0012 神奈川県横浜市西区みなとみらい 3-4-1)

開館時間: 10 時~18 時(入館は閉館の 30 分前まで)

休 館 日: 木曜日 ※8 月 13 日、9 月 24 日、11 月 19 日は開館

主 催: 横浜美術館、ヴィクトリア&アルバート博物館、読売新聞社、日本テレビ放送網

特別協賛: キヤノン

協 賛: DNP 大日本印刷

後 援: ブリティッシュ・カウンシル

公式サイト: <https://www.marie2026.jp>

公 式 X: <https://x.com/mariestyle2026>

公式 Instagram: <https://www.instagram.com/mariestyle2026>



横浜美術館
YOKOHAMA
MUSEUM OF ART



Created by the V&A
- touring the world

そのほかの出品作やチケットなどの詳細情報は、5 月の報道発表会と合わせて公開する予定です。
報道発表会の日時・会場につきましては、追ってご案内いたします。

《報道関係のお問い合わせ》

「マリー・アントワネット・スタイル」広報事務局(ユース・プランニング センター内)

担当: 芦田・大山・池袋

〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町 9-8 KN 渋谷 3 ビル 4F

Tel: 03-6821-8126 Fax: 03-6821-8869 E-mail: mas2026@ypcpr.com

◎本展と同時期に開催される横浜美術館の展覧会

「毛利悠子 Recompose 第60回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館帰国展」

会期: 2026 年 7 月 24 日(金)~11 月 23 日(月・祝)

会場: ギャラリー9

「横浜美術館 コレクション展」

会期: 2026 年 8 月 1 日(土)~2027 年 2 月 11 日(木・祝)

上記 2 つの展覧会に関するお問合せ先: 横浜美術館 代表 TEL: 045-221-0300

広報担当: 高橋、岩見屋、高野 TEL: 045-221-0319